

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 水口 拓寿

本論文は、中国宋代から清代中期の儒教知識人が風水やその理論に対して表明した言説、即ち自ら執筆した風水理論書や理論書の注釈を主な資料として、風水思想及び批判の論理を系譜付け、その言説史を当該時期の儒教思想史や術数学史の上に定位しようとした試みである。全体の構成は大きく二部からなり、前後にそれぞれ序論と結論を附している。

序論は、問題の所在と研究方法を提示した所である。風水の基本概念を説明し先行研究を吟味し、思想研究には文化人類学の成果を活用すべきことを主張した。第1部では、南宋期の蔡元定(或いは父の蔡癸)撰とされる風水理論書『癸微論』を分析し、清代の『四庫全書総目提要』が同書を「儒理」に則って風水を探究する著作だと評したことの儒教思想史的・術数学史的意義に鑑みながら、同書に記述された風水理論を解説した。また同書の全体及び『四庫全書総目提要』の関連箇所にも注を附した。第2部では、風水の基本経典の一つ『葬書』に明代の鄭誥が施した注釈、同じく明代の徐善繼・徐善述撰『人子須知資孝地理心学統宗』などを資料として、『癸微論』以後の儒教知識人による風水思想再構築の諸相を分析した。また宋代に至って、風水が「儒教経典に正当性を保証された、卜筮による墓地選び」に代わる占術(即ち、儒教文化の一翼となり得る)との認識が、初めて儒教知識人の間に興ったことや、彼らによって「風水」と名指された占術の実体が北宋期を境に主流の交替を起こしたことを、宋代における道学の興隆及び術数学の変質と関係付けながら論述した。結論では、序論に呼応する形で第1部・第2部の成果を要約した。

本論文で第一に評価すべきは、中国学(テキスト)に軸足を置きつつ、文化人類学(コンテキスト)の知見を積極的に摂取したことである。即ち、人類学者のフリードマンは風水が「道徳と無関係な技術」であり、その流行がむしろ祖先に対する不孝を誘発しかねないことを指摘し、人類学者のエイハンが墓中の祖先に人格的な感情や意志を認め、人格的な風水観を強調したが、本論文では、フリードマンとエイハンの相反する見解がどちらも思想史的知見に照らして有効であることを検証した上で、風水思想の文献学的な分析に援用して、風水思想の構造を明らかにした。第二に評価すべきは、風水理論が朱子学のそれときわめて親和的であることを、理論書・族譜・私礼文献などの分析を通して明らかにしたことである。親和性の証明は宋明思想史研究における風水研究の意義と必要性を宣揚しており、重要な意味がある。

本論文には地理学との関係解明など、今後に残された課題もあるが、先行研究を批判的に継承しただけでなく、従来の思想研究のレベルを大きく越え出たところも多い。

審査委員会は以上に基づいて、本論文が博士(文学)の学位に値すると判断する。